大坂島之内の町割と敷地割構成について

近世大坂城下町の構成と形成過程に関する研究 その1

ON THE TOWN PLANNING AND SUBDIVISION OF SIMANOUCI AREA

A study on the town planning and the formation of Osaka Castle town Part 1

吉田高子*, 松口輝久**

Takako YOSHIDA and Teruhisa MATSUGUCHI

The purpose of this study is to clarify the formative period and the process of Osaka Castle town, through the analysis of the "Mizucho Ezu" (land register map) in the Edo era.

This article concentrates on the Simanouchi area. The Nagahori Canal was divided the Simanouchi area from the Senba area. The north Simanouchi area was likened to the Senba, on the town planning and subdivision.

Before the excavation of the Nagahori Canal, the Unagidani and the Kunosuke-cho street were the limits of the old Senba area.

Keywords : Osaka Castle town, Mizucho Ezu, Simanouchi area, subdivision, town planning

大坂城下町, 水帳絵図, 島之内, 町割, 敷地割

1. 序

大坂城下町の建設は, 一般に豊臣期・松平忠明期・江戸幕府直轄期の三期に分けられているが¹⁾, 各期における城下町の範囲²⁾, 並びに町の形態³⁾については, 史料的な制約もありいまだ推定の域をでないところが多い。

しかしながら, 幕府直轄期の城下町大坂については, 古地図を始めとする史料の存在によって, 具体的な構成形態についての究明も可能であると考えられるが, これまで殆どなされていない⁴⁾。

そこで幕府直轄期大坂の町割・敷地割⁵⁾とその形態, さらに街区構成⁶⁾の形状とその寸法などの特質を明らかにし, これにより大坂城下町の形成過程について検討しようとする⁷⁾。

大坂城下町の町構成は, 明暦三年(1657)の『新板大坂之圖』にその基本を見ることができ, 街区構成は, 貞享四年三月(1687)『新撰増補大坂大絵圖』によって始めてほぼ正確な形を示し, それが現在の街区構成に継承されていることが確認できる。

また, 明治十九年(1886)の『大阪実測図』によって, 町割・敷地割の方向も知ることができ, 船場では東西向の縦町を基本としているが, 島之内の南半分では南北向

の横町を形成している点が指摘できる。

城下町大坂の復原は, これまで佐古慶三氏が, 南区の範囲(船場の南部と島之内)について, 『水帳絵図』により旧町の範囲を示す町割の復原がなされており⁸⁾, また矢内昭氏, 宮本又次氏らによって⁹⁾, 『水帳』による船場北部の町と上町の一部の町について復原が試みられているが, いずれも都市形成史の視点から町を捉えたものではなく, また地域全体の広範囲に, 町割・敷地割を扱ったものではない。

『水帳』特に『水帳絵図』から得られる寸法を包含した街区割・敷地割・街路・町境除地下水道・その他は, 大坂城下町の都市の形態を知る基本史料として重要なものである。また, 遺存する『水帳絵図』の年代の多くは安政三年(1856)のものであるが, そこに描かれた町と記載事項は基本的には明暦期まで遡ることが可能である。

そこで, 『水帳絵図』の揃っている島之内を先ず復原し, そこから遡源し船場・上町の成立過程をも解明しようとする。また, 島之内は先に示したように, その南半分で町割方向の転換を生じており, 成立過程の違いを暗示している点でも重要な地区である。

* 近畿大学理工学部建築学科 助教授・工博

** 京都大学工学部建築学科 研究生・工修

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Science and Technology, Kinki Univ., Dr. Eng.

Research Eng., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ., Kyoto, M. Eng.

図-2 安政3年『水帳絵図』による島之内の町割・敷地割復原図

堀川沿いの町を除くと、心斎橋筋より西側の区域に限られ、また、清水町筋と九之助町筋より北側に限られていることがわかる。

心斎橋筋より西側の区域は、旧三津寺村の領域とされるところであり、この旧三津寺村の市街地への転換時期については、元和五、六年(1619, 20)と考えられており¹⁸⁾、この区域の町はその頃に、船場より続く東西型町割で成立したと考えられる。

また、島之内には南北方向に心斎橋筋、堺筋などが通っており、これらに沿った町は南北型町割を構成していた。

その他の南北型町割は、これらの街路に並行した形となっているが、これらの町から御城に向かうには、長堀川を渡り北の船場に入るか、九之助町筋が清水町筋で東折し、九之助町筋¹⁹⁾で東横堀川を渡り直接上町に入る形のいずれかであった。

次に、街路との関係で町を見ると、両側町と片側町に分類できる。島之内では両側町を基本としているが、片

側町を構成している町は、次の15町である。

- ① 堀川沿いの町 (小西町・南問屋町・炭屋町・長堀茂左衛門町・道頓堀久左衛門町・道頓堀宗右衛門町・道頓堀大和町)
- ② 鰻谷通りの町 (鰻谷一丁目・鰻谷二丁目・高間町・尾上町)
- ③ 船場と島之内にまたがる町 (長堀平右衛門町・長堀心斎町・長堀次郎兵衛町・長堀十丁目)

いずれも堀川に近い堀川に沿った位置に存在するものであることが判る。

このように島之内では、東西型町割と南北型町割が地区を分けて存在し、また、街路との関係からみた町の形態としては、両側町を基本としていながら、堀川に近い位置では片側町が存在するという傾向を認めることができる。

4. 長堀川沿い町形態の乱れと長堀川開削前の街区計画の復原

長堀川の開削は島之内の成立につながるが、その時期は、元和五年に当該地域の農地から市街地への転換開始と着工、元和八年(1622)には長堀川が完成したとされている²⁰⁾。この事情は『心斎系譜』に、

此時伏見町人三栖清兵衛、池田屋次郎兵衛、伊丹屋平右衛門と心斎、長堀川上下二十七町横幅七十五間申請、川幅二十五間堀立之、両側造町屋

とあり、長堀川周辺地の開発は伏見の四町人つまり、三栖清兵衛、池田屋次郎兵衛、伊丹屋平右衛門、心斎(岡田新三)により請け負われたものであることがわかる。

その開発範囲は横幅七十五間、川幅二十五間とあり、

表-2 島之内における型別町割分布状況

東西型町割の町(23町)
①長堀川沿い (長堀平右衛門町・長堀心斎町・長堀次郎兵衛町・長堀茂左衛門町)
②道頓堀川沿い (道頓堀久左衛門町・道頓堀宗右衛門町・道頓堀大和町)
③心斎橋筋西側 (大寺町・松原町・佛町・周防町・南毛綿町・三津寺町)
④鰻谷通り、九之助町筋、清水町筋 (鰻谷一丁目・鰻谷二丁目・高間町・九之助一丁目・九之助二丁目・山崎町・南紺屋町・中津町・綿袋町・岩田町)
南北型町割の町(30町)
①東横堀川沿い (小西町・南問屋町)
②西横堀川沿い (炭屋町)
③堺筋、波速橋筋、心斎橋筋 (南米屋町・油町一丁目・油町二丁目・油町三丁目・白銀町・常珍町・南紺町・酒辺町・鋳屋町・木挽町北之丁・木挽町中之丁・木挽町南之丁・菊屋町)
④帯屋町筋、板屋橋筋、鍛冶屋町筋、中橋筋、三休橋筋、井池筋 (ト半町・南竹屋町・石灰町・道仁町・高津町・関町・鍛冶屋町一丁目・鍛冶屋町二丁目・玉屋町・南塗師屋町・南笠屋町・道頓堀御前町・南笠屋町・道頓堀布袋町)

丁目南側の敷地奥行が12.5間と小さくなるという、長堀川開削によるしわ寄せが生じることになった。

このように長堀川開削前の街区割を復原することが可能であり、鰻谷通りの東西型町割の両側町が、船場の延長線上に計画されていたと言える。

さらに「うなぎ谷町橋」は、惣構の西堀に当たる東横堀川に架かっていたことが、『当代記』の慶長五年(1600)七月十五日の項に見られ²³⁾、慶長十七年(1612)の『大阪分町地図』²⁴⁾にも、惣構西南角に架かる橋として描かれ、「凡ソ鰻谷筋ノ道ヨリ南ハ泥沼多シ道筋ハ有ルノミナリ」と付記されている。

以上のことから、その街区計画と共に長堀川開削前、しかも、慶長十七年以前の船場の南限として鰻谷通り(鰻谷橋筋)を考えることができる。

5. 東西型町割の南限と敷地割方向の混乱

鰻谷通りより一筋南には、『新板大坂之圖』の明暦三年によると、すでに九之助橋が見られる。しかし、慶長十七年の『大坂分町地図』には、

今云九之助橋筋、八幡筋、堺筋、太左衛門橋筋、心斎橋筋等ノ通路ノミ有之

と付記されており、九之助橋は描かれていないが、その道筋は既に存在していたことがわかる。つまり、船場からの街区割を考えた九之助町筋の存在は、慶長十七年に遡ることが可能で、鰻谷筋に続いて開発され船場の南限となったと考えることができる。

このことは、町割方向の上からも読み取ることができる。つまり、船場から続く東西型町割は、心斎橋筋以西の地域を除くと、堺筋より東側では九之助町筋(大宝寺町筋ともいう)、西側では清水町筋を南限として、南北型町割にその方向を変えており、安政三年の『水帳絵図』によると、その町割方向転換のために、九之助町筋では

敷地割方向に混乱をきたしていることがわかる。

九之助橋につながる九之助町筋の白銀町(図-4)は町の東半では九之助町筋に面した東西型としているものの、西半では浪速橋筋に面した南北型の敷地割をとっている。それに続く山崎町でも、町の西部分では九之助町筋にそった東西型敷地割となっているが、東部分は中橋筋に面した南北型敷地割としている。

関町(図-5)は元、九之助筋之内鍛冶屋町と呼ばれており、九之助筋之町として存在していたが、鍛冶屋町筋が優先し、敷地割は南北方向の町となっている。

このように九之助町筋の町では東西型町割を基本としているが、南北に通る街路が橋につながるなどして影響力の強い場合には、同一町内でも敷地割方向を南北に変えるという混乱がみられる。

また、九之助町筋の一筋南の清水町筋には岩田町と綿袋町(元2.5ブロックの西清水町)があり²⁵⁾、これに2ブロックの中津町が隣接している。

堺筋より西側では、これら清水町筋の2~2.5ブロックの町が東西型町割の南限を形成していたことが知られる。

このように東西街路の九之助町筋と清水町筋の町については、東横堀川に架かる九之助橋に向う東西型町割の南限となっていたが、長堀川開削により、長堀川に架けられた橋につながる南北街路に方向性が生じ、町割・敷地割方向に変化をきたしたものと考えられる。

その結果、町割方向変更の境となる九之助町筋の白銀町・山崎町・関町などの町では、町内で敷地割方向に混乱をきたすことになった。

それはまた、九之助町筋と清水町筋より南側に、南北型町割・敷地割の町を成立させることにもなったと考えられると、これらの南北型町割・敷地割は、長堀川開削後に成立したということができよう。

図-4 『白銀町水帳絵図』(安政3年5月)
(大阪商業大学商業史研究所蔵)

図-5 『関町水帳絵図』(安政3年5月)
(大阪商業大学商業史研究所蔵)

6. 心斎橋筋と堺筋の町の成立

心斎橋筋に沿った銚屋町は南北型の町で、北に鰻谷通り、南に九之助町筋が通り、西は折れ曲がって大宝寺町と接した変形の町となっている。

その成立は元和六年『三津寺畠やしき二成申候帳』に「かさり屋町」のあるところから、三津寺村農地が市街地に転換された、この元和六年とすることができる。

安政3年の『水帳絵図』によると、図—6のように、心斎橋筋に接した部分については南北型敷地割を構成しており、心斎橋筋の西側では奥行20間の敷地を確保しているが、東側は奥行19間4尺8寸から13間まで階段状を示し、東隣の東西型の南紺屋町に押された形となっている。

心斎橋筋の木挽町中之丁についても、西では奥行20間となっているが、東では東西型の岩田町に押され奥行15間となっている所もある。しかし、木挽町南之丁以南では東西共に奥行20間を確保している。

このことは、木挽町中之丁以北の心斎橋筋沿いの南北型の町の成立が、東西型の九之助町筋や清水町筋の町より遅れたことを示していると言える。

心斎橋筋そのものは、『大坂分町地図』にも見られることから、九之助町筋とは同時期には成立していたとも考えられるが、その町の形成については、『水帳絵図』の下水道の排水経路からも、旧三津寺村域の町の成立と同時期とするのが良いと考えられる。

次に、堺筋についても、『大坂分町地図』にあり、南堀（後の道頓堀川）開削時には日本橋が架けられたとすると²⁶⁾、この時点で船場から堺に向かう主街道として存在していたことになる。

堺筋と九之助町筋の交差点となる箇所には南米屋町

（元、九之助町四丁目）が存在している。南米屋町は九之助町筋にありながら、堺筋に沿った南北型の町割を構成している。これは、その町の成立が九之助町筋の東西型町割の町より早いか、あるいは堺筋の優位さによるものと考えることができる。また、その南には中津町の一部が南北型の敷地構成となって入り込んでいる。更に南には油町一丁目・二丁目・三丁目が続くが、いずれも堺筋（街路幅4.5から5間）に奥行20間の敷地が整然と並んでおり、早くからこの堺筋に沿って南北型町割が成立していたことが考えられる。

7. 道頓堀川開削に伴う町の成立とその形状

道頓堀川の開削は、長堀川より早い慶長十七年に成安道頓らによって始められたが、その後大坂の陣で工事は中断し、元和元年、平野藤次郎と安井九兵衛によって再工、完成されたとされており、同年九月には「早々家を立てさせ申すべく候」²⁷⁾と道頓堀川開削に伴う町の建設の促進を、平野、安井の兩人に命じている。

また、道頓堀大和町、道頓堀宗右衛門町、道頓堀久左衛門町が、その時開発された道頓堀川北岸の町であることなどが明らかで²⁸⁾、道頓堀大和町は、その町名の由来は明らかでないが年寄安井九兵衛が町立ての主導権をにぎったとされており、道頓堀宗右衛門町は年寄山ノ口屋宗右衛門、道頓堀久左衛門町は年寄播磨屋久左衛門町に因んだ町名とされている²⁹⁾。

道頓堀川沿いのこれらの町は、安政三年の『水帳絵図』によると、大間口の敷地が特徴的である。開発者の安井九兵衛は、道頓堀宗右衛門町の堺筋角の好条件の地に西側に街区幅の41.5間、東側に半街区の20間の大間口の敷地を所有している。また、大和屋治兵衛は、心斎橋との東角に間口14間、相合橋筋（中橋筋）の東角に間口15.5間の敷地を所有している。

その他、大間口の敷地として、平野屋又兵衛は心斎橋との西角に15間間口を持ち、苫屋甚助の19.5間、近江屋権之助の17間、川崎屋武兵衛の9.5間と15間、伊賀屋宗七の15間、辰巳屋久右衛門の15間などを挙げることができる。

所有者の変移はともかく、これらの敷地規模が大きくなると、変わっていないものとして、自己資金によるとされている開発が、道頓堀川沿いに、このような大間口の敷地所有を生んだと考えられる。

この道頓堀川沿いの町は東西型町割を持っているが、それらの街区北半の町は、心斎橋筋西側の三津寺町を除いて、いずれも南北型の町割となっている。

また、道頓堀川沿いの町の敷地奥行寸法（ここでは半街区の南北内法寸法となる）は、いずれも船場と同じ20間となっているが、その北側の半街区の南北内法寸法については、いずれも20間より相当大きくなってい

図—6 安政3年の『水帳絵図』による銚屋町復原図

る。

これは、道頓堀川沿いの敷地は、道頓堀川開削時の元和元年に奥行 20 間で整えられたが、その街区北半の敷地にまで計画が進まなかったことを示している。

その街区北半の敷地は、その後、船場側から南下した形で街区が構成されることにより成立したため、奥行 20 間を基本にした街区寸法に合わない³⁰⁾南北型敷地割の町が、ここに生じたものと考えられる。

また、道頓堀川開削後に成立したと考えられる「道頓堀」を町名に冠した町は、先の道頓堀川に沿った町以外に道頓堀御前町・道頓堀布袋町がある。さらに明暦元年以前の町名³¹⁾が、道頓堀塗師屋町・道頓堀畳屋町・道頓堀笠屋町であった南塗師屋町・南畳屋町・南笠屋町がある。心斎橋筋と浪速橋筋に挟まれたこの一画には、この他、「道頓堀」を町名に冠しないが南新町と呼ばれていた玉屋町があることから、これらの南北型の両側町 6 町（道頓堀御前町・道頓堀布袋町・南塗師屋町・南畳屋町・南笠屋町・玉屋町）は、島之内でも比較的新しく町割された町と推定できる。

8. 小 結

以上、大坂城下町の形成過程について、本稿では『水帳絵図』を基本史料として、島之内の町割・敷地割復原図を作成し、町形態から島之内における町の形成過程を考察した。

島之内の町形態は両側町を基本としているが、鰻谷通りでは、北側は長堀川沿い街路に正面を向ける片側町であり、南側は鰻谷二丁目などの北側街路に面した片側町となっており、変則的な形態をとっていることが判った。これを『水帳絵図』などによって、長堀川開削前の計画に復原すると、鰻谷通りにも両側町を考えることができ、慶長十七年頃までは船場側から鰻谷通りまで連続して両側町が計画されていたと考えられ、鰻谷通りをこの時期の船場の南限と考えることができた。

次に、町割方向について見ると、船場と同じ東西型町割は、堺筋より東側では九之助町筋まで続いており、西側では心斎橋筋以西の旧三津寺村の領域を除くと清水町筋まで続いているが、九之助町筋・清水町筋より南では南北型町割となっている。

この九之助町筋に相当する道筋は、慶長十七年の『分町地図』にも描かれていることから、九之助町筋の町は、鰻谷通りの町に続いて、船場と同様の町割がなされたと考えられた。

また東西型町割の九之助町筋に沿った白銀町や関町では、敷地割方向に乱れがみられる。それは、元和五、六年の長堀川開削によって、長堀川に架けられた橋が、町割、敷地割の方向を変える作用をしたためではないかと思われる、九之助町筋より南に南北型町割が成立したのも、

長堀川開削以後と推定できる。

しかし、船場から堺につながる街道でもある堺筋は、長堀川開削前から成立しており、この筋に沿った南北型町割は整然とした敷地割を持っており、早くから計画的寸法で形成されていたようだ。

また、道頓堀川開発に伴う町の開発は、元和元年に船場と同じ東西型町割で、奥行 20 間の敷地を確保する形で行われた。しかし、道頓堀川沿いの街区北半では南北型町割となり、街区寸法も乱れており、街区北半（道頓堀北裏）では、街区南半の道頓堀川沿いの町より遅れて島之内北側の町の成立を待って整備されたと考えられた。

このように、『水帳絵図』の復原図に見られる町割方向・敷地割方向・町の形状から、島之内における大坂城下町の形成過程を追うことができた。さらに『水帳絵図』では各敷地寸法も明示されており、街区構成寸法からもその成立過程について検討する必要があるが、それについては次稿に譲ることにする。

謝 辞

本論の基本的な史料となった島之内各町『水帳絵図』の閲覧を、快く許可された大阪商業大学商業史研究所に深く謝意を表します。

注

- 1) 『新修大阪市史第 3 巻』（平成元年 3 月 1 日 新修大阪市史編集委員会）には、豊臣期については秀吉期の城下町形成と秀頼期の城下町改造、松平忠明期については松平忠明期の新町、江戸幕府直轄期は伏見組の開発と三郷の成立としている。
- 2) 伊藤 毅氏は、『近世大坂成立史論』（生活史研究所 昭和六二年）の中で、天正期から慶長にかけての船場の領域は、北は道修町筋・南は順慶町筋・東は東横堀川・西は心斎橋筋と述べている。
これに対して、内田九州男氏は、「大坂と堺」（『図説大阪府の歴史』河出書房新社 平成二年）の中で、慶長三年（1598）の『大坂町中屋敷替』により船場は大々的な開発が行われ、城下町に組み込まれた。その範囲は、北は道修町の通り・南は南北久宝寺町の境あたり・東は東横堀川・西は心斎橋筋あたりと述べている。
- 3) 豊臣期城下町大坂の復原に関しては、内田九州男氏が、城下より四天王寺につながる大坂平野町を復原し、表 120 間、奥行き 20 間の南北に長い短冊型地割を示し、また、慶長期の大坂城下概念図を示している。（『まちに住まう一大阪都市住宅史一』1989 年 平凡社）伊藤 毅氏は天正期の天満寺内町南北 5 町東西 7 町の範囲を示し、南北に表 60 間、奥行き 10 間の短冊型町割を復原している。また、島之内については三津寺村の城下町への編入過程について、『三津宮文書』を中心に考察している。（『近世大坂成立史論』）
- 4) 宮本雅明氏は「初期大坂の都市空間と都市デザイン」（前掲『まちに住まう一大阪都市住宅史一』）の中で豊臣期と徳川期の天守に向かう城下町のメインストリートからのヴィスタを論じている。

- 5) ここで述べる「町割」とは、町の方向を含めた各町ごとの配置構成のことであり、「敷地割」はその街区構成内の各敷地の割りつけのことである。
- 6) ここで述べる「街区構成」とは、東西及び南北の街路によって囲まれた1ブロックの形状及び構成寸法のことである。
- 7) この内、一部は既に報告した。(松口輝久・吉田高子「『地籍地図』による船場と島之内の町割について」日本建築学会大会学術講演梗概集 1992 年 8 月)
- 8) 佐古慶三氏は「南区古町図説」で、江戸期の町名と範囲を昭和期の町に照合した図を示している。('南区志' 昭和 3 年 12 月)
- 9) ①矢内 昭氏(船場の一部と上町の一部の復原)
「船場の町並みあちらこちら—安政水帳などからの復原—」(『大阪春秋 31 号』昭和 57 年),「大坂上町の町割と町並」(『大阪府の歴史 8 号』1977 年),「城下町と周辺の開発」(『新修大阪市史 第 3 巻』平成元年 3 月)
②宮本又次氏(船場の一部の復原)
『大阪の研究 第 3 巻』昭和 44 年 4 月
- 10) 宮本又次氏の『近世大坂の経済と町制』(文献出版 1985 年)に『水帳』について詳細に述べられている。松平忠明期の元和二年(1616)に離散した町人を引き戻し、同二月には町割ができ、水帳の提出を要求していることが『大坂濫觴書一件』より分かる。
水帳はその後、明暦元年(1655)、寛文二・十一年、延宝七・八年、天和元年、元禄六・七年、宝永三・五年、享保十一年、宝暦三年、明和四年、安永七年、寛政十年、文化十二年、文政八年、安政三年(1856)に改正された。
- 11) 「大坂水帳所在目録」(『大阪府立図書館紀要』第 2 号 1966 年)の仲田喜弘氏の稿に、『水帳』の所有者、年代・町別の遺存状況が表にまとめられている。
- 12) 前掲『大阪市史』第一巻に、「大阪城の總構堀は文禄三年正月、伏見城三ノ丸の石垣并に總構堀の工事と同時に命ぜられたものにして、その南面なる東横堀川が慶長五年以前に竣工せしこと(中略)明かなり。」とある。
- 13) 前掲『大阪市史』第一巻に、「時慶卿記に所謂新堀を東堀或は東横堀川といふは、西横堀川の開鑿成りてより、之と區別せんが爲なり。而して後者の開鑿年代は、之より分流して江子島の北端に注げる阿波座堀川—阿波堀川が、慶長五年の開鑿に成れるを以て推知得べし。」とある。
- 14) 『安井文書』に、「南堀河之内、先年寄如有來兩人ニ申付候條、早々家を立てさ可申候。其上兩人之者、古寄取立申堀川之儀候間、萬事肝煎才覺可仕候。以上、元和元年卯九月十九日」とある。
- 15) 内田九州男氏は、「大坂三郷の成立—市街地の形成を中心として」(『大阪の歴史』七号 昭和五七年)の中で、「心斎系譜」の記述により長堀川の開削は元和五年(1619)冬に着工、同八年(1622)に完成されたとしている。
- 16) 『大阪市地形図』は、昭和四九年(1974)測量、昭和五九年(1984)修正のもので、縮尺は 1/2500 である。
- 17) 前掲、佐古慶三氏による「南区古町図説」の町割を参考にした。
- 18) 内田九州男氏の前掲「大坂三郷の成立—市街地の形成を中心として」の中で、旧三津寺村の農地分布を図化しており、この範囲を採用した。
- 19) 東横堀川に架かる島之内の橋は、延宝九年(1681)の『辰年増補大坂之圖』においても、「九介橋」のみであった。
- 20) 注 15) に同じ、「元和五年冬から長堀とその両側町のための敷地が農地から市街地に転換され、開削工事が始まり、元和八年に堀完成と考えることができるであろう。」としている。
- 21) 長堀次郎兵衛町については、伊藤 毅氏の「近世大坂における都市の境界領域(3)—長堀次郎兵衛町の構造・その 1」「同・その 2」日本建築学会大会学術講演梗概集(昭和 59 年 10 月), (昭和 60 年 10 月)に取り上げられているが、いずれも『水帳絵図』によるものではなく、また視点も家屋数の動向や家屋敷数所有のあり方にあり、本論とは異なっている。
- 22) 松村 博『大阪の橋』(1987 年)では『地方役手鑑』の記載として、長堀橋の橋長 18 間 6 寸、幅員 3 間 4 尺 7 寸を挙げているが、長堀川の川幅は幕府の記録でも 25 間程度としている。この川幅には、汀から斜めに設けられた浜地も含まれていたと考えられる。
- 23) 前掲、矢内 昭「城下町と周辺の開発」で取り上げており、東横堀川には北から「浜の橋・高麗橋・平野町橋・淡路町橋・備後橋・本町筋橋・久太郎町橋・久法(宝)寺町橋・あんとうし(安堂寺)町橋・うなき谷町橋」の橋々が架設されたと指摘している。
- 24) 内閣文庫蔵で、森 幸安の宝暦七年の写しによるものであるが「天正十三年分町、慶長十七年著圖」とある。
- 25) 町の規模は、街路によって四周を囲まれた 1 ブロック=1 街区の単位で示す。
『大坂三郷町中御取立承伝記』によると、明暦元年(1654)水帳御改に際して、町名の変更、大町の分割などの編成替えがなされた。
宝暦三年(1753)の『初發言上候帳面寫』にはその町名と規模の変遷が記されている。('大阪市史』第五卷 大阪市 明治四四年 所収)
- 26) 矢内 昭「城下町と周辺の開発」(『新修大阪市史第 3 巻』前掲)において、慶長末期の大坂下町には堺筋(住吉街道)が貫通していたこと、日本橋も慶長十七年着工の梅川改修による南堀開削と関連して、大坂橋の旧跡に架設されていたことを、「大坂冬の陣備立之図」(名古屋博物館蔵)の記載その他から確認している。
- 27) 注 14) に同じ『安井文書』
- 28) 内田九州男「都市建設と町の開発」(『都市史入門 II 町』東京大学出版会 1990 年)に大規模町開発の事例(2) 一道堀堀沿岸—としてその事情を記している。
- 29) 大阪町名研究会編『大阪の町名—大坂三郷から東西南北四区へ—』清文堂 昭和 52 年 9 月
- 30) 『水帳絵図』による街区寸法の復原などについては、次稿で詳しく考察する予定である。
- 31) 注 25) に同じ。

(1993 年 1 月 28 日原稿受理、1993 年 9 月 28 日採用決定)